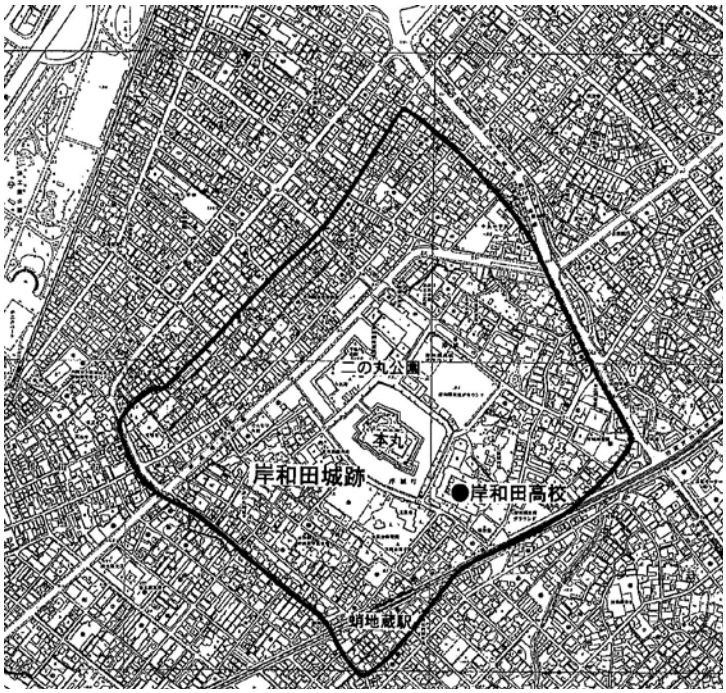
岸和田高等学校（岸和田城跡）

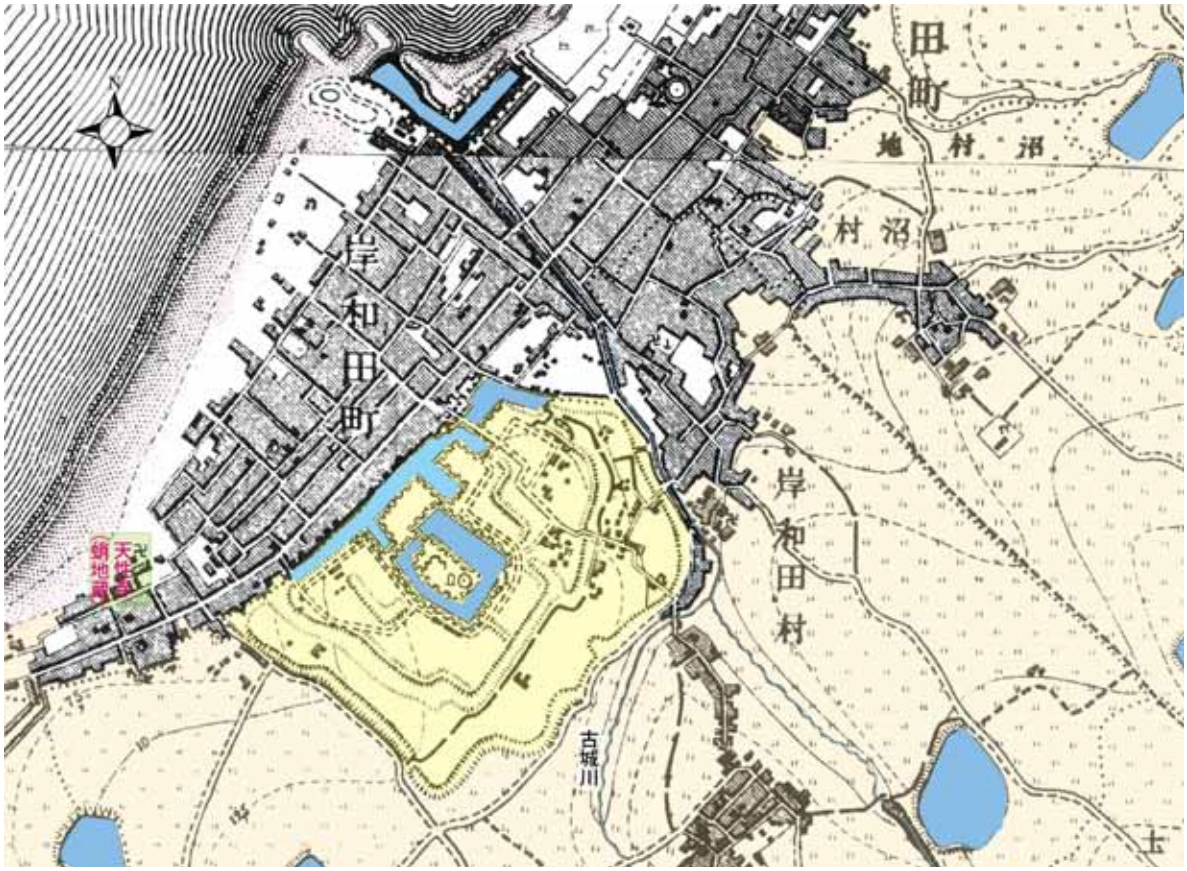


岸和田城跡位置図

岸和田城の歴史

岸和田城は、岸和田市岸城町にあります。標高約 8 メートルの洪積段丘上に立地し、すぐ西には海が迫っています。本丸・二の丸・三の丸・総曲輪からなる平城で、城の範囲は、東西約 840 メートル、南北約 940 メートルです。城の北西には、紀州街道があり、南・東には古城川が流れています。

城の起源については、建武の頃（1314 年頃）、楠木正成に属した和田高家が築城したと伝えますが、位置や規模は不明です。以来、細川氏・三好氏・松浦氏など城主は変りますが、その頃の城域は、後の二の丸の範囲までで、櫓や石垣もない簡素な掻き上げ城でした。



明治 18 年の岸和田城。お城が海沿いの段丘上に築かれていることがわかります。

天正 13（1585）年、豊臣秀吉の叔父小出秀政が城主となると、秀政は城普請に努め、3 年かけて五層の天守閣などを造りました。

元和 5（1619）年、松平泰重が城主となると防潮堤を築きました。これによって、以前は二の丸の石垣付近まで海水が及んでいたのが、町家が並ぶようになりました。また、元和 9（1623）年には、伏見城から三層の伏見櫓を移築しました。

寛永 17（1640）年、岡部宣勝が城主となると、城の整備がさらに進められ、外郭も築かれ、岸和田藩 4 万 3 千石の城下町が完成しました。以後、岸和田城は、岡部氏 13 代の居城となりましたが、明治 4（1871）年、廃藩置県により廃城となって櫓や門などは撤去されました。なお、天守閣は、それより 44 年前の文政 10（1827）年、落雷によって、焼失していました。

参道入口左側にある標石。
宝暦 2（1752）年、池大雅 筆。

昭和 29（1954）年、天守閣は岸和田市民の要望と寄附により、127 年ぶりに再建されました。

昭和 44（1969）年、城壁・城門・隅櫓などが再建されました。

平成 4（1992）年、市制 70 周年記念事業として、天守閣の屋根葺き替え・外壁塗り替えなどの大改修工事が行われました。

蛸が救った岸和田城

岸和田市南町にある天性寺（蛸地蔵）には、不思議な伝説が残っています。

「建武年間、岸和田を大津波が襲った。しかし、人家に被害がなかった。不思議に思った人々が海岸に出ると、大蛸の背に乗った地蔵菩薩があった。これを岸和田の守り本尊として、城内に祀ったが、戦乱の世のため、濠に隠した。その後、天正年間、紀州の根来・雑賀の軍勢が岸和田に攻め込んできたが、白法師と無数の大蛸・小蛸が現れ、敵軍を殺さずに退却させた。城主の夢に、白法師は地蔵菩薩の化身と告げられ、濠中の地蔵菩薩を探し出し、城中に安置した。その後、文禄年間、天性寺の泰山和尚の願いによって、当寺にそれを移した。」というのです。

市指定文化財 天性寺の石造地蔵菩薩立像（正平 17（1362）年の在銘）。岸和田市最古の石仏。

なるほど、それで、天性寺に地蔵菩薩、通称蛸地蔵がご本尊として、国内最大級の地蔵堂にお祀りされていることが分かりました。天性寺は、現在、市街地の中にあっ

天性寺。通称蛸地蔵。岸和田城の西方にあります。

て、その立地がよく分からなくなってしまいましたが、明治 18 年の地図によると、天性寺が江戸時代には、波打際にあったことがよく分かります。

学校を掘る

現在の岸和田高等学校の前身である旧制岸和田中学校の校舎は、明治 30（1897）年の創立時には、岸和田城の二の曲輪の位置（現グラウンド）にありました。それが、昭和 9（1934）年、室戸台風の被害を受けたため、昭和 13（1938）年、現在の位置に移転しました。オール鉄筋コンクリートの校舎は、白色の建物だったため、当時、「白亜の殿堂」と形容されました。その校舎の解体および改築に伴い、平成 8（1996）年と平成 13（2001）年に発掘調査が実施されることとなりました。

平成 8 年の調査では、江戸時代の石垣・土塀・堀・櫓跡などが検出されました。調査地が江戸時代の岸和田城絵図によると、筆頭家老中家屋敷地の門付近に当たるため、検出した石垣・土塀は家老屋敷の門およびそれに接続する築地塀の跡と想定されました。堀は、幅 20 メートル、深さ 5 メートルの大きなもので、南北方向に長さ 26 メートルにわたって検出されました。堀の中からは、大量の瓦と共に唐津焼や伊万里焼・丹波焼などの陶磁器・漆器椀・石硯・一石五輪塔・石臼・砥石・箸・下駄・寛永通寶・銀メッキのキセル・玩具などの遺物が出土しました。堀の中に瓦礫を投棄した様子です。また、堀に接して検出された櫓跡は、石垣はすべて撤去されていましたが、石垣裏込め用のぐり石と石垣下敷用の胴木が残っていました。堀と櫓跡は、絵図に載っている岸和田城の二の丸を囲む外堀および櫓跡と想定されました。

堀跡。幅 20 メートル、深さ５メートル。
二の丸を囲む外堀です。

櫓跡。石垣の基礎となる胴木が残っていたので、石垣の存在がわかります。ぐり石は、石垣の裏込め用です。

平成 13 年の調査地は、平成 8 年の調査地の北側 50 メートルの所にありますが、江戸時代の炭や鉄滓・フイゴの羽口などが土坑中から出土しました。城の中枢部になぜ、このような鉄生産の遺構があるのか、よく分かっていません。

岸和田城の悩み

慶長 2（1597）年、小出秀政が天守閣を完成させてから、平成 26（2014）年の現在に至るまでの 417 年間、城の管理者達を悩ませ続けている問題があります。何か、お分かりですか？

答えは、崩れ続ける石垣です。その原因は、石垣に使われた和泉砂岩の脆さにあります。泉南の山でふんだんに採れる和泉砂岩は、岸和田までの運搬のコストと時間が省ける最良の石材でした。しかし、この石は風化に弱く、胴割れを起すため、常に石垣が崩れ続けているのです。このことは、天守閣の築造者達も充分に分かっていたらしく、城の防衛にとっては不利な犬走り石垣という周堤帯を石垣下部に設けています。少しでも崩れないように工夫した結果なのでしょう。

なお、岸和田城の石垣は、自然石を使い、隙間の多い野面積み（のづらづみ）ですが、積み石の面を加工し､隙間の少ない打込み接ぎ（うちこみはぎ）や切込み接ぎ（きりこみはぎ）といった新しい技法も使われています。野面積みの石材がやわらかい和泉砂岩製であるのに対し、打込み接ぎ・切込み接ぎの切石は、硬い花崗岩製です。石垣の補修工事を延宝 3（1675）年以降続けた結果、灰色の和泉砂岩と薄茶色の花崗岩が同じ石垣に混在することになりました。

向かって右側の石垣のピンク色に見える石は、修復に使用した薄茶色の花崗岩です。現在も、周庭帯の石垣が一部崩れているのが見えます。